

MONGOLIA

学校名： 東京都立町田の丘学園

氏名： 大和田 章

[担当教科：生活単元]

- 実践教科等：美術、家庭科、生活単元
- 時間数：約 40 時間
- 対象生徒：中学部 2 年生
- 対象人数：24 人

1 単元名 世界を知ろう

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界の多様性を学ぶ。(多面的、総合的に考える力)
- ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界と自分とはつながっていることを学ぶ。(つながりを尊重する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

『特別支援学校学習指導要領解説』の社会には、「(6) 外国の様子や世界の出来事などに興味や関心をもつ。」とある。そして、「②「外国の様子」とは、外国の自然、気候、風土、人々の生活などを指す。例えば、熱帯、温帯、寒帯地方の人々の衣服、料理の種類、食事の習慣、住居の様子、あいさつの言葉など、そこに住む人々が暮らす生活の様子のことである。これらについて調べることは、外国の文化や習慣を理解し、ものの考え方の違いを考える基礎となる。ここでは、外国の人々の生活の様子を知ることを通して、国内だけでなく国外にまで視野を広げることができるようにすることが大切である。」とあるように、自分の生活圏のことのみならず、外国の人々の生活を知ることで視野を広げることの大切さが記述されている。同じく②には「最近では国際的な規模の催事も多くみられ、その際に、我が国をはじめ諸外国の国旗に触れることがあるので、地図などでその国名と位置を確認するなどして、我が国や外国の国旗に対する親しみがもてるようにすることが大切である。また、内容(5)の「地域の様子や社会の変化」とも関連させながら、多様な文化を尊重できる資質や態度を育成していくことが大切である。」と国名や国旗に親しむことの大切さ、多様な文化を尊重する資質や態度の育成についての記述もある。以上のことを鑑み、本単元では外国の文化を学ぶことで生徒たちが視野を広げ、多様な文化を尊重する資質や態度が育成されることを期待する。

(2)児童生徒観

本学年は男子 19 名、女子 5 名(うち重度重複学級の生徒男子 3 名)の計 24 名からなる。全生徒が特別支援学校小学部からの進級ではなく、町田市の特別支援学級からの生徒がいる。障害の種別は主障害は知的障害であるが、自閉症スペクトラム、情緒障害、ダウン症候群などがある生徒がいる。東京都の療育手帳は 2 度(重度)から 4 度(軽度)を取得している。

学習前に本学年にモンゴルのことを質問してみた。モンゴルという国の名前を知っている生徒が 1 名ただで、国旗、地図上の位置を知っている生徒は一人もいなかった。また、朝青龍や白鵬について知っているかどうか質問してみたところ、知っている生徒は一人もいなかった。このように本学年の生徒

にとってモンゴルは全く未知の国になる。全く未知の国のモンゴルを学ぶことで、視野を広げ、異文化を受け入れる素地ができることを期待する。

(3) 指導観

本学年は、国語・数学は学習能力別に授業をするが、生活単元、美術、家庭科は一つのグループとして授業をする。児童生徒観で記述したが、療育手帳は 2 度から 4 度という認識の幅が広いグループで授業をすることになる。開発教育・国際理解教育の指導形式は大きく二つに分けることができる。体験型と認識型である。体験型とは、五感で感じる(見る、聞く、匂う、味わう、触れる)、やってみる、参加する、交流するなどである。認識型とは、気づく、発見する、分かる、納得する、実感する、共感するなどである。本学年は軽度から重度と発達段階の幅が広いグループであるので、体験型を中心に授業をすることになる。

5 評価基準

観点	文化的多様性についての知識・理解	相互依存についての知識・理解	寛容・共感についての関心・意欲態度
評価規準	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、文化の多様性を知る。	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、外国と自分とのつながりを知る。	モンゴルの生活・習慣を体験することとおして、異なる文化を受け入れる。
評価方法	授業への参加態度・発言	授業への参加態度・発言	授業への参加態度・発言

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	(生活単元)モンゴルの紹介	日本とモンゴルの地図上の位置を知る。日本の相撲、モンゴルの相撲、モンゴルのお茶を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。日本の相撲の紹介とモンゴル相撲の体験。モンゴルのお菓子とお茶を飲食する体験。
2	(美術)モンゴリアンブルーをつくる	日本の空とモンゴルの空をとおして文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。授業で喫茶店を開くときの内装を製作する。
3	(美術)ゲルをつくる	モンゴルの住居のゲルを通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。授業で喫茶店を開くときの内装を製作する。
4	(生活単元)モンゴル茶の提供	喫茶店にいらしたお客さんにモンゴルのお茶を提供することで、モンゴルの食文化について理解してもらう。	授業で喫茶店をしたときに、お客さんにモンゴル茶を提供する。 お店屋さんの本番までに、準備の授業でモンゴル茶の提供は 7 回ほどしている。
5	(生活単元)モンゴル劇	モンゴル劇を創る過程でモンゴルの生活を知る。文化祭にいらしたお客さんにモンゴルの様子を伝えることで、モンゴルの生活を理解してもらう。	モンゴル劇を創る。文化祭でモンゴル劇をする。 文化祭本番までに 20 回余り練習している。 この授業だけは一斉授業ではなく、モンゴル劇を演じる 7 人のグループの授業である。
6	(音楽)モンゴルの音楽	モンゴルと日本の音楽の演奏を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。馬頭琴と三味線の生演奏を聴く。
7	(家庭)ホーショーローの調理	モンゴルと日本の料理を通して文化の多様性を知る。	モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。ホーショーローを作って食べる。餃子を作って食べる。

8	(生活単元)まとめの授業	モンゴルと日本について学ぶことで文化の多様性を知る。	これまでの授業で勉強してきたことを振り返る。
---	--------------	----------------------------	------------------------

7 授業事例の紹介

小单元名【モンゴルのまとめ】

(1) 指導案

(ア)実施日時 1月13日(金)第4限

(イ)実施会場 2年5組教室

(ウ)本時の目標

- ・日本と異なる国があることを知る。

(エ)指導のポイント

- ・授業に使用した教材、写真などで、今までの授業を振り返る。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
13:10	・日本とモンゴルの国旗【4】【6】 ・地図上の位置【4】【6】 ・日本とモンゴルの相撲【4】【6】 ・日本とモンゴルのお茶【4】【6】 ・日本とモンゴルの空【2】【6】 ・日本とモンゴルの住居【4】【6】 ・騎馬民族とゲルとモンゴル相撲(文化祭)【4】【6】 ・馬頭琴と三味線【4】【6】	・日本とモンゴルの国旗を確認する。 ・地図で日本とモンゴルの位置を確認する。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの相撲の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルのお茶の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの空の判別をする。 ・写真を見ながら日本とモンゴルの住居の判別をする。 ・写真を見ながら文化祭を振り返り、モンゴル文化を判別する。 ・写真、映像を見ながら馬頭琴と三味線を判別する。 ・写真を見ながら餃子とホーショーローを判別する。	学	・今までの授業が思い起こされるように、授業の様子を写した写真を使用する。 ・授業で使用した同じ教材を使用して、勉強したことを思いお越しやすくする。 ・生徒の積極性を引き出すために、間違えてもよい雰囲気をつくる。	(評価規準) モンゴルの生活・習慣を体験することを通して、異なる文化を受け入れる。 モンゴルの生活・習慣を体験することを通して、外国と自分とのつながりを知る。 モンゴルの生活・習慣を体験することを通して、異なる文化を受け入れる。 (評価方法) 授業への参加態度・発言
14:00	・餃子とホーショーロー【4】【6】				

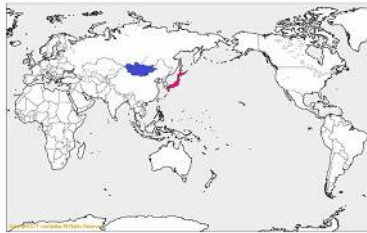
(2) 授業の振り返り

今回の授業は、今までしてきたモンゴルの授業の総復習をした。授業は体験型授業をしてきたので、今回が初めての座学となった。特別支援学校の生徒は映像や音楽を理解することは得意であるが、文字のみ、話し言葉のみの説明を理解することは得意ではない生徒が多い。そこで、できる限り、過去の授業に使用した映像、音楽、そして記録写真などを使いながら授業をした。

改善点としてはもっと細かく発達段階別に発問を用意できたらよかったと考える。

(3) 使用教材

もんごる



すもう(相撲)



左から モンゴルの地図上の確認。グーグルマップで学校からモンゴルに行く。日本とモンゴルの相撲。

いえ(家) げる(ゲル)



しゃみせん(三味線) ばとうきん(馬頭琴)



そら(空) もんごりあんぶるー



左から 日本とモンゴルの家、三味線と馬頭琴、日本とモンゴルの空

(4) 参考資料等

- ・日本国際理解教育学会(2010)『グローバル時代の国際理解教育』明石書店。
- ・国立教育政策研究所(2014)「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7」,
<https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h25/2_1_allb.pdf>(2017年1月9日アクセス)
- ・文部科学省(2008)「特別支援学校学習指導要領解説」,
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1278527.htm>(2017年1月9日アクセス)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

生徒たちがどのくらいモンゴルという国を日本とは異なる国という理解をしたかを測ることは難しい。しかし、日常生活とは異なる体験をしたことで、異文化を受け入れる素地はできたのではないかと考える。また、日本とモンゴルをはっきり異なる国であると理解した生徒もいる。その生徒たちが、今後はモンゴルだけではなく、他の国にも関心を広げてくれことを期待している。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

「計画」発達段階の幅が広い生徒たちが対象となるので、体験型の授業を中心に計画した。
 「実行」座学は可能な限り少なくして、体験型の授業を実行した。
 「評価」計画通り実行できた。ただし、もっと準備期間があれば、より発達段階に応じた授業もできただろうし、体験型と認識型を合わせた授業ができたかもしれない。
 「改善」私は、知的障害中学部においては、今回初めて開発教育・国際理解教育の授業をした。この経験を生かし、より発達段階に応じた授業、そして体験型だけではなく、認識型の授業ができるようにしたい。

10 教師海外研修に参加して

開発教育がめざすものは何であろうか。開発教育協会は「共に生きることのできる公正な地球社会の

実現」(下線部は筆者)と述べている。そして、国際理解教育については小学館の「教育基本用語」に「世界の諸国民が国を越えて理解しあい、お互いに人間として尊厳と信頼をもって協力することによって、世界の平和を実現することを理念とする教育」(下線部は筆者)と記述されている。

私は開発課題とされている、人権、環境、平和、開発について考えることも大切であるが、それと同様に多文化共生についても考えることも大切であると考えます。

もし相手国の開発課題だけ考えていたら、それは相手国の立場を考えない一方的な支援になりかねない。多文化共生の立場から、どうしたら相手国の立場になることができるかを考えながら、相手国の開発課題を考えることが大切である。もし、相手国の立場を考えず、日本の立場から、日本の価値観から援助を考えたら、それは相手国にとって大きなお世話になりかねないだろう。

私は、多文化共生のことを考えつつ、開発課題を考えることができる児童・生徒になって欲しいという願いをもちながら授業をしていきたい。